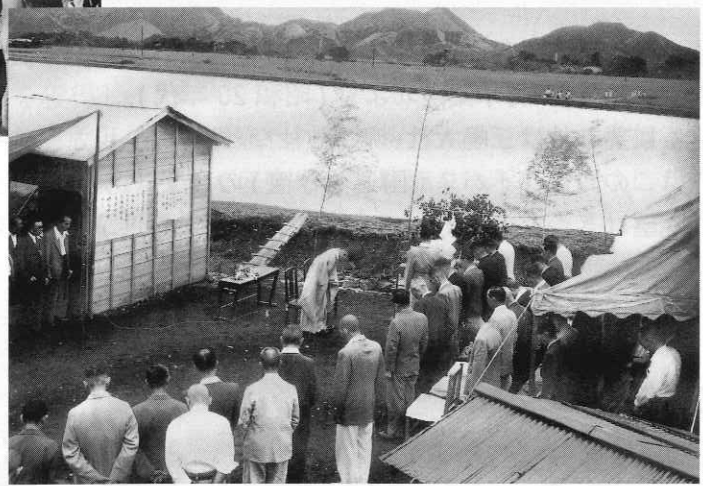


郷土資料館だより

Vol. 22. No.3

2000. 3. 20



中郷温水池の建設

楽寿園小浜池に湧き出した水は源兵衛川を流れ下り、下流域の中郷耕地の田を潤す用水となっていました。しかし水温 15 度という湧き水は稲の生育のためには低温すぎます。

戦後、川を堰き止め温水ダムに一時貯水して水温を上げてから放水しようとして計画されたのが中郷温水池です。米の収穫増を期待しての事業でした。

何本もの用水が枝分かれする現在の富田町の水田地帯に、国・県の事業として 21780^m² の温水池が出来上がりました。昭和 28 年 (1953) のことです。『県営中郷温水施設概要』によれば、総工費 1260 万円、貯水量 37,547^m³、貯水時間 12 時間 25 分、水深 1.8m、長さ 420m、幅 91m、気温 33 度の時に入水水温 15 ~ 15.5 度、放出水温 19 ~ 22 度と大きな効果があったように報告されています。しかし中郷農民の中に「大して水温は上がらなかった。」と話す人もいます。

水温上昇効果は別にして、中郷耕地へ伸びる 5 本の用水口の高さ・幅が公平に決められたため、

田植え時の水争いの種は減ったといわれます。

それまで源兵衛川から次々と分水する用水の堰の高さをめぐり、田植え時にはどこかで争いが起きていました。とはいえ自分の田へ水を少しでも多く入れるために下流域の堰を夜中にこっそり壊す事件はあとを絶たず、昭和 40 年代 (1965 ~) まで中郷耕地の各集落は田植えの季節に水当番を置き、集落の田へ入る用水堰の見張りをしています。

また温水池は三島市民の憩いの場であり、魚釣り場としても人気がありました。逆さ富士が美しく映える撮影スポットでもあります。

上の写真は起工式の時ですが、約 50 年前、周辺は一面の田んぼでした。中央奥に電業社 (緑町) の建物が望めます。下は竣工式の写真。平田・松本の集落まで田が広がっています。この後バイパス (国道一号) が建設され、家が次々と建ち、温水池周辺の景観はすっかり変わってしまいました。

「なかざと村(中郷村)」あれこれ

現在開催中の企画展「なかざと村(中郷村)」(5月28日まで)より、開発が進み今は見ることができないひと昔前の中郷地区の写真を紹介します。



大根干し風景、青木集落北より(昭和20年代)

遠くに望む林は三嶋大社、柳原神社などの社叢。現在はこの間にバイパス(国道一号線)の高架があり眺望はきかない。(長川智氏提供)



青木の田の代かき風景(戦後)

昭和30年代に農作業の機械化が始まる前は米作りは重労働だった。田植え前に牛を使い田の土をこなす。牛は農民にとって家族同様であった。(松金房雄氏提供)



中郷女子青年による盆踊り(中郷小、戦前)

戦前から戦後にかけて青年団の活動は大変活発だった。各集落の青年たちは芝居を演じ、村民に喜ばれていた。踊りの後ろの校舎は御園の遠藤家の屋敷を移築したもの。(木口操氏提供)



大場赤王の山を開墾する田方農学校の生徒

(昭和15年11月)

戦争中、食糧増産のため箱根山麓は開墾され畑とになっていった。この生徒たちは勤労奉仕隊。現在の東大場分譲地の60年前の姿である。(大隅英一氏提供)



梅名墓地への埋葬(昭和36年2月)

梅名と松本境(オムロン東側)に共同墓地がもうけられたのは明治21年のこと。以来、梅名の各家の墓石が並ぶ。箱根山裾の森は右内神社。現在国道136号線が横切り、建物が軒を連ねている。(溝田重芳氏提供)



大場オテンノウサン神輿の飛び込み(戦前)

大場・梅名・中島は昔から7月6日のオテンノウサンにエネルギーを爆発させた。集落中を練り回った神輿は最後に橋から投げ落とされる。担ぎ手も飛び込み、祭りはクライマックスを迎える。(大村雅彦氏提供)

富士・沼津・三島博物館共同企画展 記念講演会

『富士・愛鷹・箱根山麓の縄文時代と縄文のまつり』 平成12年1月22日

三島市生涯学習センター 講師：日本考古学会 瀬川裕市郎氏 参加者：68名

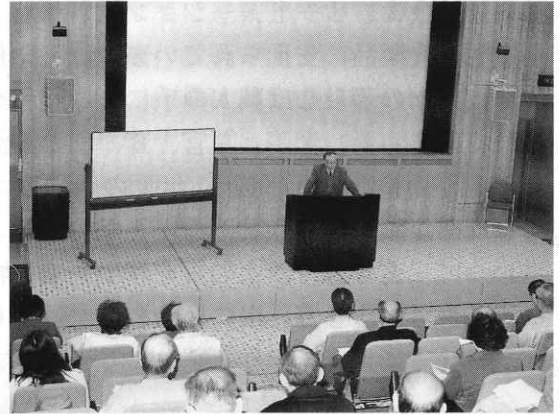
本年度の三市共同企画展テーマより、三島地域の縄文時代の特色について講演いただきました。

縄文時代の富士・愛鷹・箱根山麓では、遺跡の数が少なく、またその遺跡の面積も概して狭く、一軒あたりの道具類が多くありません。また、ここから出土する土器は甲信地方産が多く、石器も石皿くらいしか地元のものを使っていないようです。生活していた証しとしての貝塚や泥炭があまり見られません。このことから三島地域には大きなムラよりも仮設的な住居が多いことが特徴といえます。

縄文人には、狩猟や漁労、採集によって食料を獲得し、自然とともに生きる上で、大地の豊穡、病からの解放、無事な出産への願いがありました。千枚原遺跡から発掘された土偶や顔面把手付土器、石棒などの祭祀具、また埋甕による埋葬をつうじ、縄文時代の信仰の背景としての、靈魂の再生という世界観が顕著にうかがえます。

考古学は、近年発見が相次いでいるので、この三島地域からも新たな発見があるかもしれないという期待で、話を締めくくられました。

(その後2月、安久・箱根田遺跡より古墳時代の興味ある遺物が発掘されました。)



昔にチャレンジ!

第4回郷土教室 「むかしの道具を使ってみよう～秋」



千歯こきを使って稲をこく

らに唐箕で粃と秕(しいな)、ゴミを選別しました。

もみすりと精米は検査用の小型の器具を使い、もみがらと玄米に分け、精米するという過程を説明しました。そして精米した新米をかまどで釜炊きしました。

炊き上がったご飯を、イナゴの佃煮、金山寺味噌、梅干で食べました。食事の間にも講師より、イナゴを取った話など、かつての食卓のおはなしがありました。イナゴは初めての参加者が多く、気味悪がる子、チャレンジする子など、さまざまな反響がありました。炊いたご飯はおこげまで、見事に平らげて帰りました。

平成11月11日(木) 参加者 12名

講師 鈴木 辰巳氏

今年度最後の郷土教室として、日常食べているお米が、稲からどのような手順を経て、食卓にあがるかをテーマに、資料館の資料を使ってその作業を体験してみました。

開講式では講師が、米作農家の家庭を数えましたが、参加者の中にはいませんでした。

早速実習にうつり、まず千歯扱きを使い、稲を引きながらこきました。次に足踏脱穀機で脱穀をしました。次にもみを入れた箕から扇風機の風力でわらくずなどゴミをとばし、さ



箕(もみ)と扇風機で粃と選別する

職人の“わざ” — 染め物職 —

現代社会は、オートメーション化された工場で大量生産された製品に支えられています。工業化される以前は、人々の暮らしは職人の手による製品や技に支えられていました。大工、左官、鳶、また鍛冶、桶などの職人がいました。平成12年夏の企画展では、暮らしを支えた職人を取り上げたいと思います。

かつて三島では、湧水の川を利用して染物業が盛んに行われていました。川には染め上がった布がさらされ、町には染物業を担う下請けの職人がいました。

今でも、染物業 紺屋(こうや)を続けている東本町「遠州屋」高林保巨さんを紹介します。

家号「遠州屋」の由来は、先祖の出身地が遠州浜松である事に由来します。もともとそこは打ち上げ花火と染物の産地で、農業のかたわら夏は花火、冬は染物屋で働き、毎年三島の町に打ち上げ花火の技を競いに来たそうです。花火と染物一見無関係ないようですが、火薬と染物に使う薬品には色を出すという



川にさらし糊をとる

大きな共通点があります。

毎夏、大社に花火を打ち上げに来ていた初代は、三島の水に惚れ込みこの地に腰を据え、明治28年(1895)48才で三島の町に骨を埋めました。そして現在は四代目、そして五代目へと受け継がれています。

初代が三島の水に惚れ込んだのは、三島の水は夏冷たく冬温かい、つまり年間通じて水温が15℃と変わらないからです。その上、染物をやるにはもってこいの硬水で、木綿・麻等の型付けをした布を川に流しておけば、川の流れがきれいにさらしてくれます。

昭和2年頃(1927)三島には染物屋が22件ありました。当時は全部分業で、下絵師から糊付け屋へ、そして染



糊づくり

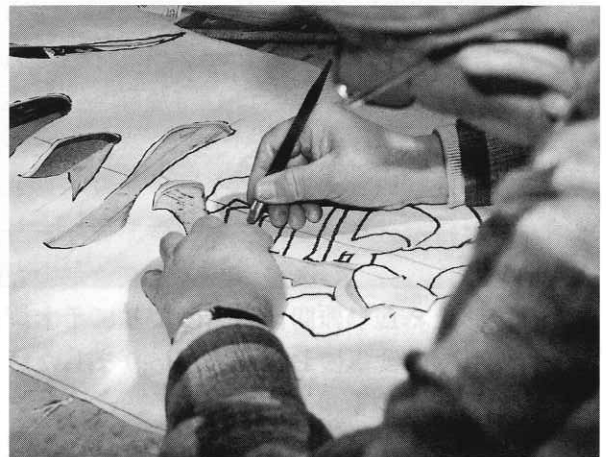
物屋へと回って来ます。染物屋に回って来るまでには、例えば夏時分に頼んだ糊付けが暮の25日頃になってもまだ出来ていない。そのしわ寄せで染物屋は寝ずに仕事をしたそうです。

糊付けが出来なければ染めたくても染められない、転じて「期日を守れない」という意味の「紺屋のあさって」ということわざがあります。先の三代目はそれでは困ると云う事で、型紙切りから糊作りを研究し自分の家で一手にやるようにしました。

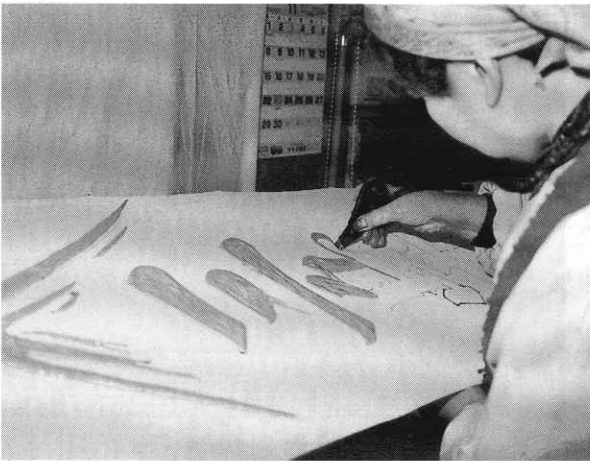
作業は布づくりから始めます。生き地をしばり、「洗濯ソーダ」で煮ます。

下絵は「かたつき」といって、型紙に下絵をクラフト紙に拡大機でのぼして切り、型づくりをします。クラフト紙からは10枚くらい取れ、それ以上は本型紙を使います。

型紙と糊さえ出来ればもう染物は何時でも出来ます。



型づくり



筒書き

事ができます。

この他、長さ5間もの神社幟等も作ります。その際、上を大きく、下に向かって小さく書くことで、遠くから見て全体の字が揃って見えます。鯉のぼりなど細かい絵柄のものは、筒書きという方法で糊を置きます。手ぬぐいや大漁の旗等大量に染める場合は、50枚位重ねコンプレッサーを使って一度に染めてしまいます。色を染めた布は、伸子張りでよく乾かしたあと、川でゆすいで糊を流します。包丁で糊をこそいだり、布をゆすって糊を落とします。

藍は直径70cm、深さ1m50cm程の藍甕に染料を立て、毎日酸素を入れ管理をします。この液は黄色で、空気に触れると一斉に青い色になります。



伸子張りで乾かす

に代わるのでしょうか。近年染物職人も少なくなっているのです。関東から中部地方にかけて方から注文を受けているということです。紺屋はお天気と水が勝負です。それらがなければ仕事が成り立ちません。三島の空気、水を守っていかなければならない、ということでした。

型紙と糊さえ出来ればもう染物は何時でも出来ます。例えば風呂敷を染める場合、先ず布に型紙を置き、へらで糊を擦ります。糊は薄いと透け、厚いと乾かないので均一に伸ばします。型紙には必ず星があって、この星と星を合わせれば型は連続していきます。糊は餅米の粉と脱脂した米糠、石灰を団子にして煮て、これをこねた物です。この作業は奥様の秘伝の作り方で、重要で重労働な仕事です。夏と冬では濃度が違い、この糊のできが悪いとしわが出て、うまく染まりません。

型を付け乾燥させてから、呉汁（大豆を潰した汁）を敷きます。大豆の蛋白質は染料が着き易く、一旦締まると染料が裏へ抜けないので、裏を別の色に染める



藍の染めつけ

紺屋の仕事は、ひとつでも手抜きをすると、しあがりにならなくなります。紺屋の仕事は、暑かったり、寒かったりするので、技術はもとより体も丈夫でなければつとまりません。紺屋として、昔ながらの技術で技とともに、最新の機器も導入し量産も行っています。意外な事に、不景気になると神頼みをするのか、幟の注文が増えます。暖簾も同様に、飲み屋さんが不景気な時ほど注文が増えます。それだけ店の持ち主が頻繁



藍 甕

博物館紹介

～郷土資料館運営協議会委員 研修視察の報告2～

羽村市郷土博物館

開館：昭和60年（1985）

昨年9月11日に当館運営協議会委員の研修視察の報告です。当日は、前号で紹介した「入間市博物館」に続き、東京都羽村市にある羽村市郷土博物館を訪れました。

羽村市は武蔵野台地の西の端にあり、市の西境を多摩川が流れています。大正から昭和初期には日本有数の養蚕の村として知られ、戦後も畑作農村でした。1960年代以降青梅線以東の台地の都市化が急速に進み、あわせて自動車・電機・金属製品などの工場が進出してきました。70年代に住宅団地がつくられ、人口が急増しました。平成3年市制施行。人口約56,000人。

羽村市郷土博物館は昭和60年4月に開館し、市民の文化的創造をはぐくむ場として活動しています。常設展示の基本テーマを「多摩川とともに」として、羽村の自然や歴史・文化、特に玉川上水・中里介山（羽村出身の小説家、著書に『大菩薩峠』がある）に関する資料を収集、調査し、公開しています。

展示は多摩川の河岸段丘とそこでの暮らしや歴史、江戸の町へ水を送り続けていた玉川上水の仕組みや羽村との関わり、養蚕業・農家の近代化から現代までを紹介しています。展示物のメインに、玉川上水取水堰の江戸時代と明治期の復元があります。江戸時代に多摩川を堰きとめてつくられた玉川上水の取水堰は、現在も東京都内に給水する上水道の取水口として利用されています。東京都の4年生の副教材に玉川上水が取り上げられているため、小学校の見学利用が多いということです。

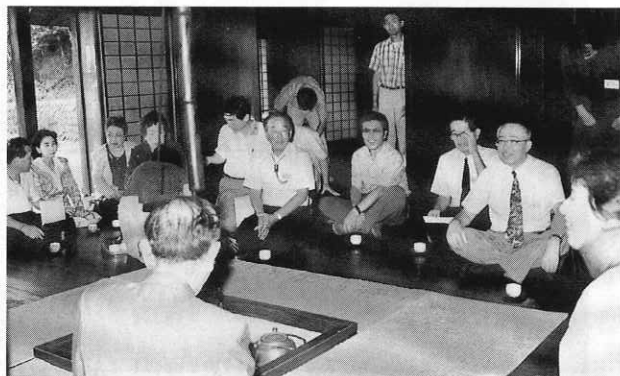
屋外には、国指定重要民俗文化財 旧下田家住宅があります。この家屋は、江戸時代末期に建てられた入母屋造、萱葺で、養蚕や畑作を営んでいました。昭和57年現在地へ移築しました。開館時間中は自由に見学でき、また囲炉裏では今も薪をくべ、火を起こしています。当日は、ここで羽村市博物館運営委員と交流し、両市博物館の実情を報告、歓談しました。羽村は江戸期天領で葦山代官所の管轄であり、明治初期には葦山県に所属していたこともあり、三島・葦山に親しみを感じるとのことでした。



羽村市郷土博物館



玉川上水取水堰（江戸時代・復元）



旧下田家にて羽村市博物館運営委員と懇談

羽村市郷土博物館

住 所／東京都羽村市羽村 741

電 話／042 - 558 - 2651

開館時間／9：00～16：30 入館無料

休 館 日／月曜・月曜祝日は火曜・年末年始

三島からは中央自動車道経由で八王子ICより国道16号線で北へ。片道約2時間

平成11年度 郷土資料館 事業報告

区分	事業名	内容	実施日 入館者または参加者	講師・備考
企画 展 示	「にしきだ村 (錦田村)」	昭和16年に三島町と合併した錦田村(錦田地区)の歴史と民俗をたどる。	平成11年3月20日 ～5月16日 14,728名	図録作成
	「かぶりもの」	衣類の一種として頭にかぶるさまざまなかぶりものがあるが、資料を通して「かぶるといふ民俗」を考える	平成11年7月24日 ～11月17日 27,846名	パンフレット作成
	「富士・愛鷹・箱根 山麓の縄文時代」	三島・沼津・富士の代表的な縄文遺跡を取り上げ、縄文人の生活と交流を考える	平成12年1月3日 ～2月27日 10,977名	3市共同開催 パンフレット作成
	「なかざと村 (中郷村)」	昭和29年に三島市と合併した中郷村(中郷地区)の歴史と民俗をたどる。	平成12年3月19日 ～5月28日	
教 育	縄文土器作り(3回)	縄文土器作りをとおして古代の生活に対する理解を深める体験教室	①7月27日 32人 ②7月29日 30人 ③8月25日 32人	
	夏の郷土学習	(野外学習)「三島の巨木・名木を訪ねて」	8月18日 18人	高島 勝氏
普 及	郷土教室(体験教室)	竹細工づくり	6月12日 10人	瀬川 到氏
		石うすを使う	7月10日 28人	鈴木辰己氏
		古代の生活を体験(縄文土器で料理)	10月23日 16人	池谷初恵氏
		昔の道具を使ってみよう～秋	11月13日 11人	鈴木辰己氏
活 動	ふるさと講座	「古道と古城めぐり」 ①箱根旧街道と山中城をたどる ②三島周辺の中世山城を歩く ③三島の古道を探る	①9月24日 30人 ②10月6日 32人 ③10月28日 30人	①斎藤 宏氏 ②中野国雄氏 ③鈴木勝彦氏
		「中郷村を歩く」	平成12年3月22日	小泉安三氏
	企画展関連講演会	「千枚原遺跡と縄文時代のまつり」	平成12年1月22日 68人	瀬川裕市郎氏
出 版 活 動	「郷土資料館だより」	郷土資料館広報及び活動報告など	年3回 各 1,500部	無料配布
	企画展関連出版物	「かぶりもの」パンフレット	発行 2,000部	無料配布
		「富士・愛鷹・箱根山麓の縄文時代」パンフレット	発行 2,000部	無料配布
		「なかざと村」図録	発行 500部	
古文書研究	「三島宿本陣家史料集(12)」	発行 300部		

その他の主要事業

◇「ふるさと人物」説明板 —平井源太郎— (一番町白滝公園) ⇨

◇資料館1階ホール 電飾掲示板 「三島の昔話」3話追加
—「こわめし坂」「手無地蔵」「きつねとおばあさん」—

◇インターネット・ホームページの開設

URL: <http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>

資料館運営協議会委員紹介

去る11月より今後2年間、資料館の活動の協力や助言をいただく、運営協議会委員の方をご紹介します。
よろしく願いいたします。

委員長 鈴木 辰己 副委員長 迫田 信行
井出多美子 諏訪部敏之 高澤 辰美
高島 政壽 西川 惣三 原 知信
平沢 早苗 山岡 修一 山田 修
山田 益美 以上12名(敬称略・五十音順)

◆新収蔵資料

郷土資料館に次の方々から
ご寄贈いただきました。
ご協力ありがとうございました。
(敬称略)

平成11年11月～平成12年1月

森 智 三島市大社町
風呂桶 1点

福田 育男 函南町間宮
鳥かご 1点

大村 雅彦 三島市大場
村長就任挨拶状 2点
家庭用砂糖回数購入券 1点
写真 昭和初期 8点
郵便局事務封筒 1点

大場 正男 福岡県太宰府市
三四呂人形版画 4点

増田 ヒデ子 三島市加茂川町
三島市婦人会会服 1点

久保田 章 三島市谷田
田ころがし 1点
カルチベータ 1点
麦播種機 1点

鈴木 信雄 三島市佐野
動力式わらきり機 1点

もみかき棒 1点
飼葉切り 1点
蓑 1点

佐野文一郎 三島市谷田
伊豆国君澤郡玉澤村誌 1点

松根 肇 三島市泉町
8ミリ映写機 1点

内田 昌宏 富士市吉原
ナガスクジラのひげ 1点

八木 傅 三島市本町
愛国婦人会記章 2点

和服整理編み箱 1点
店看板 大正末 1点
木札「三島委託商組合」 1点

鯨尺 1点
軍人遺族記章 2点
腰付きガラス戸 1対

写真大正～昭和初期 9点
写真額 文久年間 1点
震災記念章 S.6.11.26 1点

姿見 1点
透き窓 彫刻型紙 2点
刷り物 M.27 6点

銭拵 1点
竹籠明治 1点
提灯 4点

手帳 沼津工業株式会社 2点
伝票差し明治 1点
土蔵引き戸 1点

日本赤十字社員章 S.21 2点

のぼり 1点
のれん 5点
鍼 明治 8種

版木 明治 11点
武運長久祈願書 1点
伏見人形 2点

三島町青年団員章 1点
ものさし箱 1点
靖国神社 神楽之徽章 1点

「週刊朝日」万博 S.45 1点
「週間サンケイ」御成婚 S.34 1点
「大家書画和歌一覽」 1点

『輿地誌略』 明治 3点
ほか 18点

鈴木喜登己 三島市谷田
シロカキマンガ 1点

ワラスグリ 1点
足踏み脱穀機 1点
俵編み機 1点

臼 1点
杵 1点
アイロン 1点

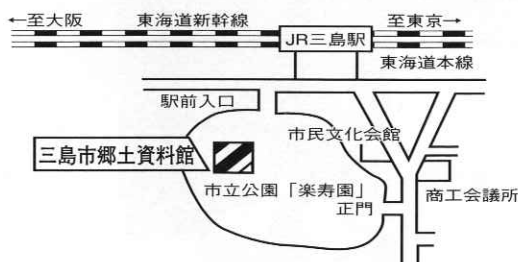
柱時計 1点
行火 1点
買い物かご 1点

せんべい焼き 1点
ほか 18点

杉山 長 三島市梅名
不動講掛軸 1点

利用案内

休館日 毎週月曜日(祝日の時は翌日、
12月27日～1月2日)
開館時間 午前9時～午後4時30分(11/1～3/31まで)
入場無料 (但し、楽寿園入場の際、有料)



三島駅(南口)から徒歩5分。市立公園楽寿園内

郷土資料館だより No.66

発行日 平成12年(2000)3月20日
(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館
〒411-0036 三島市一番町19-3
楽寿園内

TEL 0559-71-8228
FAX 0559-81-3730

E-mail: kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp

発行 三島市教育委員会